

2019年度・第1回フィールドサイエンス・コロキウム

日時：2020年1月10日（金）14:00～17:00

題目：フィールドで出会う性、性から出会うフィールド——イスラームとジェンダーとの関わりから

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・304号室

主催：東京外国語大学AA研フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

報告書：

本コロキウムは、フィールドワークを行う研究者たちが、調査地において、否が応でも突きつけられる「性」との出会いを語り、当たり前「ある」ものとして「性」とどのように付き合うかについて検討することを趣旨として企画された。現在、日本学術振興会科学研究費・基盤研究(A)「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」(代表：長沢栄治)によって、イスラーム・ジェンダー研究は活気を帯びており、中でも若手研究者らの活躍が目立つ。今回のコロキウムでは、そうした新進気鋭の研究者や、今まさにフィールドでの調査経験を積んでいる博士課程在籍者らが、調査地から持ち帰ったばかりの新鮮な報告を行った。

第一報告「フィールドにおける性、このやっかいなる好機」で、鳥山純子（立命館大学）は、「現地の」性ではなくフィールドにおける自分の性を語ることを目的とし、性と向き合うことの可能性は何かについて検討した。そこで鳥山が注目したのが、性が意識される関係性は、調査者/被調査者、外者/仲間といったフィールドワークに付随する権力性とは異なるものであるという点である。この点を踏まえ、性への意識を関係性の変化の契機として考えることができるのではないかとの提言がなされた。

第二報告「語られる男性性と沈黙——エジプトのフィールドで混乱する私」で、岡戸真幸（人間文化研究機構総合人間研究推進センター）は、調査地であるエジプトの男性の間で共有される男性性が、男性間の対等な関係を築く上で前提としてあることを指摘する一方で、そのような男性性に合致せず、彼らに対して男性性を示すことができない自分の中での葛藤を語った。そして、この葛藤の先に、性との出会いは、自身を現地社会の視点から調査対象として見る機会となるとの気づきを示した。

第三報告「ふたつの海の出会うところ——香港で触る/触られる」で、小栗宏太（東京外国語大学）は、香港で東南アジア出身の家事労働者の女性たちを調査する中で、普段自分が意識しない、自分の性/ジェンダーを意識させられた体験について述べた上で、フィールドワーカーのジェンダー表象/アイデンティティは硬直的なものとしてイメージされてきたことを指摘した。そして、クィアが調査することをどう見つめればよいのかという問題を提議した。

第四報告「<性>と遭遇する空間——アルジェのタクシー車内で繰り広げられる会話」で、

山本沙希（お茶の水女子大学）は、アルジェで利用していたタクシー運転手とのやりとりを通じたフィールドでの性との出会いを報告した。タクシーの中では、自分の意図に反して、運転手の側から性の疑問や葛藤を吐露したり、関心を向けられたりするという体験をして、公共の場では忌避すべしとされる性に否応なく向き合わなければならない状況に困惑したことを述べた。その一方で、運転手は自らの性的欲望と男性性に向き合い、山本に対してその承認を求めることによって自身の男性性を守ろうとしていたと分析した。

第五報告「気まずい、と感じること——パキスタンにおけるフィールドワーク」で、賀川（京都大学）は、現地における性規範を学ぶにつれて、現地の人々に視線を向けられるのは、自分が現地の性規範を脅かしているのではないかという不安＝気まずさを覚えるようになったことについて、エピソードを交えながら述べた。現地の性規範に自らを順応させるか葛藤しつつも、その性規範の発信者が男性か女性かによって受け止め方が異なる自分の気持ちにも向き合った。

最後に、田中雅一氏（国際ファッション専門職大学）がコメントとして、他者の性や性的欲望の客体としてではなく、自らを性的欲望の主体として議論することはできないかという問題を提議した。質疑応答の場面では、この問題に対する各々の考えが述べられ、活発な議論がなされた。